「また打つの？」コロナワクチン疲れも…専門家「強く推奨」のわけ

1/15(水) 毎日新聞

新型コロナウイルスワクチンの定期接種を受ける男性（左）＝東京都板橋区で2024年10月1日午前9時7分、肥沼直寛撮影

新型コロナウイルスの感染者の国内初確認から15日で5年。この間に、全額公費負担だったワクチン接種は昨年10月の今シーズンから高齢者らを対象とする定期接種に変わり、自己負担が生じることになった。接種が始まった当初は流行が落ち着いていたことがあってか、接種を受けた人は対象者の1割に満たない自治体が出ている。専門家は「接種率が上がらなければ、死亡者数が増える恐れがある」と警鐘を鳴らす。

「副反応つらい」の声も

「今年は新型コロナワクチンの接種はやめとくね」。多摩ファミリークリニック（川崎市）の大橋博樹院長は2024年秋、インフルエンザワクチンの接種に訪れた高齢者から何度も声をかけられた。これまでは新型コロナワクチンと同時接種する人が多かったが、今シーズンは半数くらいに減った。

当初は新型コロナの感染状況が落ち着いており、「新型コロナワクチンは副反応がつらいのに、またもう1回打つの？　もういいでしょう」という声もあった。

厚生労働省によると、定期接種用に出荷された新型コロナワクチン約3002万回分のうち、医療機関に納入されたのは2割弱の581万回分（24年11月22日時点）にとどまる。

実際に接種を受けた人の割合はどうか。名古屋市によると、対象者約60万人のうち7・3%の4万3111人（昨年11月末時点）にとどまっていた。23年秋冬接種での約40%（65歳以上の高齢者の場合）を下回る可能性がある

識者の見方は

濱田篤郎・東京医科大特任教授＝東京都新宿区で2021年12月、内藤絵美撮影

今シーズンではインフルエンザが大きな流行になっている。感染症に詳しい東京医科大の濱田篤郎客員教授は「新型コロナに関心が向かなくなっている」と指摘する。

自治体によっては助成があるものの、新型コロナワクチンは今シーズンから最大7000円の自己負担が生じるようになった。「何回も打ったから大丈夫」という「接種疲れ」が影響している可能性があるとする。

また濱田さんは、接種の痛みや腫れなどの副反応に対する抵抗感が根強いことも影響しているとみる。「今後のワクチン開発では、副反応について改善していく必要があるのではないか」と指摘する。

さらに、今シーズンから新たに導入されたレプリコンワクチンと呼ばれるタイプについて、

「接種者からワクチンの成分が周囲に広がる」との科学的根拠を欠いた臆測がネット交流サービス（SNS）で広がった。「ワクチン全体への不信感につながったかもしれない」（濱田さん）という。

「今からでも接種、考えて」

米ファイザー社製の新型コロナワクチン＝福岡市で2021年4月15日、矢頭智剛撮影

だが新型コロナが脅威であることに変わりはない。

感染症法上の位置づけが23年5月、5類に移行し毎日の死亡者数の公表はなくなり、影響が見えづらくはなった。そうした中で、厚労省の人口動態統計によると、同月からの1年間で、3万2576人が新型コロナのため死亡した。同時期のインフルエンザの死者数2244人を大きく上回る。

日本感染症学会などは、新型コロナワクチンは感染して死亡する人を減らすのに効果を示しているとして、定期接種を「強く推奨する」としている。

厚労省によると、新型コロナの感染者数は昨年11月下旬から12月末にかけて増加。1月5日までの1週間では1医療機関当たり感染者数は5・32人だった。

濱田さんは、ワクチン接種率が上がらなければ、高齢者の重症者数や死亡者数が増える恐れがあるとし、「新型コロナの流行は2月ごろピークを迎える可能性がある。高齢者は今からでも接種を検討してほしい」と話す。【寺町六花】